# 効果的短期語学研修プログラムの開発を目指して
## ―異文化感受性質問紙（IDI）による短期語学研修の効果測定―

坂田　浩　・　福田　スティーブ
国際センター　　共通教育センター

現在、多くの大学で多様な短期海外研修が展開されているが、今回は「短期語学研修」に焦点をあて、①同研修が異文化理解という点でどの程度効果があるのか、②課題や問題点はどのようなところにあるのか、③効果的な研修を構築するためのポイントは何か、という3点について考察を加えることにする。
キーワード：短期語学研修、異文化感受性、異文化感受性質問紙、海外派遣プログラム

### 1.　研究の背景と目的

1983年に中曽根首相が提案した「留学生受入れ10万人計画」が2003年に達成され、その2年後には中央教育審議会により「新たな留学生政策の展開について（答申）」が公表されたが、その内容を見てみると、「受け入れる留学生の拡大と質の確保」、「日本人学生の海外留学に対する積極的な支援」の2点が大きく強調されたものとなっている。同答申は、これまで受入れを重視してきた留学生政策から大学間の学生交流に焦点を当てた点で高く評価できるが、同時に日本人学生の海外留学に対する具体的支援策について学術的・実務的な面から検討を求めるものとしても高く評価できると思われる。

ここで、日本人大学生の派遣留学に関する現状を見てみると、国立大学が毎年海外に派遣している日本人学生（約4,400人）の約半数が1～2ヶ月程度の短期語学研修に参加する学生であり、専門分野の学問領域を学習することを目的とした本格的な海外留学は依然として少ない傾向にあるようである（国立大学協会, 2007）。同報告書は、今後海外留学を発展的に展開するための課題として、①ダブルディグリーなどの魅力ある留学プログラム作り、②留学に向けた動機の形成、③経済的支援、④海外留学に対する社会からのポジティブな評価、⑤卒業遅れや就職遅れなどの不安要因の排除、⑥語学力の向上、⑦留学前・中・後の支援、といった項目を挙げており、今後新たに国際交流プログラムを策定する際の重要な指針を提示していると考えられる。

本稿では上記①「魅力ある留学プログラムの開発」を最終的な目的として調査・研究を行ったが、具体的には「学生にとってより効果的で魅力的な短期語学研修を開発するにはどのようなことが必要なのか」ということを主たるテーマとして調査・研究を行った。短期語学研修は学生が海外に目を向けていくための糸口を提供するものであり、大学が教育面での国際化を実現するための重要な施策の1つとして今後も機能していくものと考えられる。加えて、近年の厳しい経済状況を勘案すれば「長期間の留学よりも、より効果的な短期留学を」というニーズが高くなることは確実であり、その学生側のニーズに応えるためにもより効果的で魅力的な短期語学研修の開発は重要な意味を持つと思われる。

そこで今回は、日本人学生に対する1ヶ月程度の短期語学研修と異文化コミュニケーション能力育成に焦点を当て、①短期語学研修が参加者の異文化コミュニケーション能力育成にどの程度寄与するのかについて調査を行い、②より効果的で魅力的な短期海外語学研修を企画する際の基本的方向性を提示することを目的に研究を実施した。通常、短期語学研修は「語学力向上」を主たる目的として実施されることが多いが、同研修を語学力向上という目的だけでなく、「基礎的異文化コミュニケーション能力の向上」という面でも効果が期待できるような魅力あるプログラムへとアップグレードしていくことは、大学教育の国際化だけでなく参加する学生個人にとっても非常に意義のあることである。今回はこのような理由から、異文化コミュニケーション能力に焦点を当てることとした。

本研究で用いた手法は後述のとおりであるが、概略としては、①徳島大学が実施した短期語学研修（2004年から2005年に実施）に参加した14名の日本人学部学生に対し研修後にインタビューを行い、そのインタビュー結果を基に彼らの文化差に対する「内省度」を明らかにする、②同参加者に対し「異文化感受性質問紙」（IDI: Intercultural Development Inventory）（Bennett, Hammer & Wiseman, 2003）を実施し、研修前後における異文化コミュニケーション能力の変化を測定する、③上記2種類のデータを基に、参加者の文化的内省度がどのように異

文化コミュニケーション能力に影響を与えているのかを考察する、という手法で調査を行った。異文化コミュニケーション能力の発達には、個人の文化的世界観（Worldview）を自文化中心主義的枠組みから文化相対主義的な枠組みへと変容させることが求められ、その世界観の枠組みを変容させるには、文化差をただ単に体験するだけでなく、体験した文化差について内省することが求められる。そして、「短期語学研修で体験した文化差について参加者がどの程度内省しているのか」、「どの程度自らの文化的世界観を再構築しているのか」、という2つの視点から同語学研修を分析することで、現状における研修の効果と課題を明らかにすることとした。

大学を含む多くの教育機関が国際化への方策を模索している今、具体的な留学施策についての評価・検証を行うことは非常に重要な意味を持っている。今回の研究は、多くの教育機関が実施している短期語学研修を今後いかに発展させていくかという課題に対する基礎資料と基本的方向性を提示するものとして大きな価値を持つものと考える。

## 2. 研究の前提

### 2.1. 異文化感受性発達モデル（DMIS）

#### 2.1.1. DMISの概要

Bennett（1993）は自らが提唱する「異文化感受性発達モデル（DMIS: Developmental Model of Intercultural Sensitivity）」において、異文化感受性と文化差に対する個人の世界観（Worldview Orientation）を同義的に捉えており、個人が様々な文化差を体験し自らの世界観をより複雑な体系へと再構築していくにつれて、文化差に対する認知・感情・行動面での反応もより多面的なものに変化していく（つまり異文化コミュニケーション能力が変化していく）と述べている。

同理論は世界観（ならびに感受性）の変化を発達的視点から捉えている点で非常に特徴的であり、具体的には以下の6段階を経て個人の文化的世界観（異文化感受性）自文化中心主知的段階から文化相対主義的段階へと発達するものであると解説している。

・自文化中心主義的段階

① 「違いの否定」　(Denial)
② 「違いからの防衛・逆転現象」　(Defense/Reversal)
③ 「違いの最小化」　(Minimization)

・文化相対主義的段階

④ 「違いの受容」　(Acceptance)
⑤ 「違いへの適応」　(Adaptation)
⑥ 「違いの統合」　(Integration)

各段階における特徴を以下に概説するが、各段階の詳細に関してはBennett（1993）、Hammer & Bennett（2002）ならびに坂田（2004）を参照してもらいたい。なお、各段階で提示している図1～8は坂田（2004）によるものである。

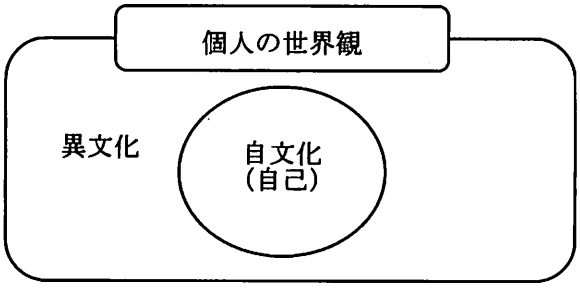
#### 2.1.2. DMISにおける発達段階

##### 2.1.2.1. 自文化中心主義的段階

・「違いの否定」（Denial）

この段階での世界観は基本的に自文化のみで構成されており、「我々 vs. その他」という漠然とした二元論的枠組みで構成されている。個別の文化差を無視し、異文化に対して大雑把で未分化な枠組みで捉える傾向があるため、文化差を無意味（無価値）な存在として位置づけ、異文化との関係を構築することには無関心であることが多い。

図1: Denial




・「違いからの防衛・逆転現象」（Defense/Reversal）

自文化との文化差に気付きが芽生え、「我々 vs. 彼ら」というやや具体化された二元論的枠組みで世界観が構成されている段階である。「違いからの防衛」（Defense）では、自文化（もしくは自己）を異文化から防衛しようとするために、異文化を卑下したり自文化の優位性を必要以上に強調したりする傾向が見られるが、「逆転現象」（Reversal）では、本来所属していた自文化に対してよりも異文化に対して価値を置く傾向があるが故に、自文化を相対的に低いものとみなししたり、異文化の優位性を必要以上に強調したりする傾向が見られる。

図 2: Defense

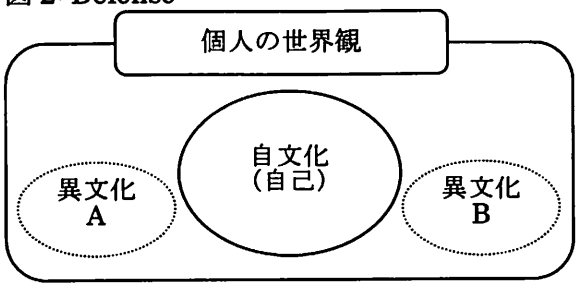
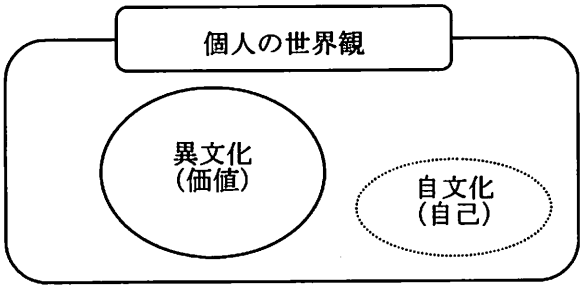


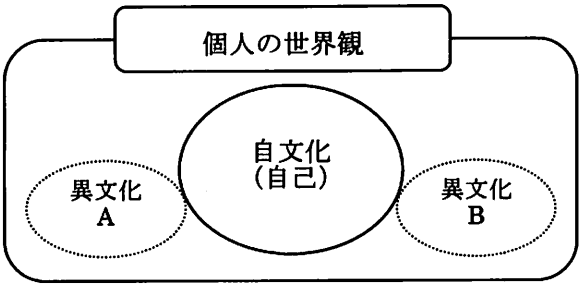

図 3: Reversal




・「違いの最小化」（Minimization）

この段階における世界観は、依然として「我々 vs. 彼ら」という二元論的な枠組みで構成されているものの、自文化と異文化の間に人間性などの基本的共通性を見出し始めている点で特徴的である。異文化との共通点を強調するが故に、自分達と共通する点に関してはその価値を認めるが、そうでない点に関しては否定的な反応をする傾向が見られる。

図 4: Minimization

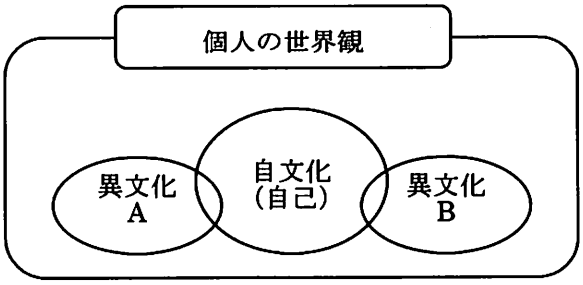



2.1.2.2.　文化相対主義的段階

・「違いの受容」（Acceptance）

この段階での世界観は、「我々 vs. 彼ら」という二元論的な枠組みが緩やかに融合しはじめ、自文化と異文化の間に共通する部分が現れてくる点で特徴的である。「自文化のみならず異文化にもそれなりの意味付けをするようになり、お互いの文化を多様な文化の一つとして認識し始める」ようになり、異文化に対する興味・関心が高くなる傾向が見られる。積極的に異文化でのコミュニケーションパターンなどを学習するようになるが、あくまでも学習が中心であり、学習した内容を実際に運用できる段

図 5: Acceptance

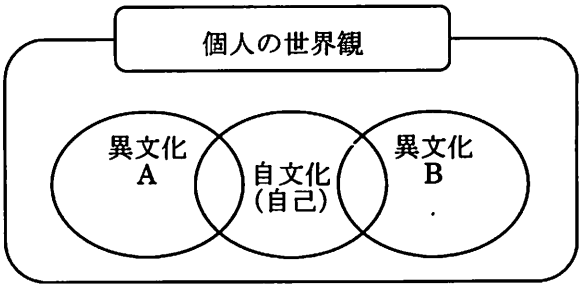



階ではない。

・「違いへの適応」（Adaptation）

この段階での世界観は、自文化と異文化の融合が更に進むが故に、異文化といえども自己とは切り離せないようになっている点で特徴的である。この段階では、認知面で相手の立場からも文化差を意識的に定義できるようになることから、共感的な感情や行動面での意識的な適応が傾向として見られるようになる。しかしながら、これらの共感的感応や行動面での適応は、あくまでも意識的なものである点で次の「違いへの統合」（Integration）とは異なるところである。

図 6: Adaptation




・「違いの統合」（Integration）

この段階での世界観は、自文化と異文化の融合が更に進行し、個人の中で新たな文化が創造されるという点で特徴的である。認知的には、自己にとって自文化・異文化は同等に重要なものであると捉え、より多文化的な枠組みで自己を定義する傾向にあることから、感情面では「どちらの文化に所属しているか分からない」（「閉じ込められた辺境性」: Encapsulated Marginality）といった反応や、「どの文化も自分の文化のような気がする」（「発展的辺境性: Constructive Marginality」）という反応を特徴的に見ることができる。自文化と異文化各々にお

ける適切な行動を無意識的に選択することができるという点で特徴的であるが、文化的世界観のなかで自己をどのように位置づけていくかが課題となる。

図 7: Encapsulated Marginality

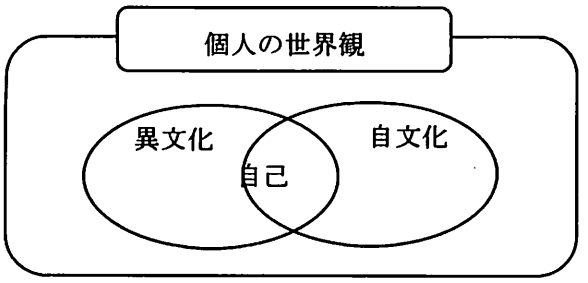
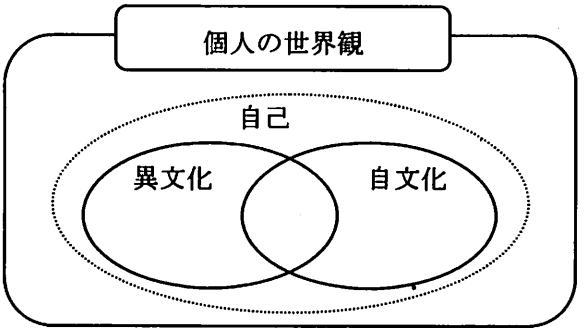



図 8: Constructive Marginality




2.2. 異文化感受性質問紙（IDI）

Hammer, Bennett & Wiseman（2003）が開発した異文化感受性質問紙（IDI: Intercultural Development Inventory）は、個人の異文化感受性レベルが DMIS のどの段階にあるのかを測定するために作成された質問紙である。今回の研究では 50 の質問項目から構成された IDI Version 2（日本語版）を用いるが、その妥当性および信頼性は非常に高く（Hammer, Bennett & Wiseman, 2003）、多くの研究で利用されており（Paige, 2003）、その応用範囲は非常に広いと思われる。

IDI のスケールは四重構造になっており、① Profile (PS)および Profile (DS)という 2 つの IDI スケール、②DD Scale、R Scale、M Scale、AA Scale、EM Scale という 5 つの Profile (DS)サブスケール、③サブスケールの詳細を示すクラスタースケール、④クラスタースケールの詳細を示す説明スケールが設定されている。各スケールの概要は参考資料 1 のとおりである。なお、各スケールの詳細については、坂田（2004）ならびに Hammer & Bennett（2002）、Hammer, Bennett & Wiseman（2003)を参照してもらいたい。

2.3. 異文化感受性と文化的内省

異文化感受性が文化差に対する個人の世界観（Worldview Orientation）と同義であり、個人が様々な文化差を体験し自らの世界観をより複雑な体系へと再構築していくにつれて、文化差に対する認知・感情・行動面での反応もより多面的なものとして発達していくということは先にも述べたとおりである。

異文化感受性（または、文化的世界観）を発達させていくためには文化差を体験し、そこから文化の多様さを学びとることが必要不可欠であるが、この学びは文化差を体験することによりなされるものであり、具体的には、①文化差を体験し、②体験した文化差について内省を行い、③文化差に対応する際の課題と対処方法を検討し、④検討した対処方法の検証を行う、というステップを繰り返すことで異文化に対する感受性が徐々に発達していくものと考えられる（津村, 1991）。

その中でも特に、文化差に対する内省は課題および対処方法の検討に大きく影響を与えるものであり、個人の文化的世界観を発達させる上で非常に重要な役割を担っていると思われる。たとえ文化差を体験したとしても、客観的で複眼的な視点から体験を内省することが出来なければ文化差を相対的に位置づけることは困難であり、結果として自文化中心主義的な世界観を基に課題や対処方法の検討を行ってしまう可能性が高いからである。

本稿での分析の方法については後述するが、今回の研究では以上のような理由から参加者の「文化的内省度」を中心にインタビューの分析を行うこととした。

## 3. 手法

3.1. 調査対象および調査方法

徳島大学が 2004 年から 2005 年にかけて実施した短期語学研修を対象に調査を実施した（学部学生 14 名：男性 2 名、女性 12 名）。参加者の年齢はいずれも 18 歳から 20 歳であり、研修以前に海外渡航を体験した参加者はいなかった。

語学研修はアメリカ、イギリスの大学付設語学研修施設にて実施され、アメリカは南イリノイ州立大学カーボンデール校付設語学研修施設（CESL: Center of English as Second Language）で 2004 年 8～9 月および 2005 年 2 月に各 5 週間、イギリスはウェールズ大学スウォンジー校付設語学研修施設（CALS: Centre of Applied Language Studies）で 2005 年 3 月に 4 週間実施された。

研修期間中各参加者は研修先大学近くのホ

ストファミリーに滞在し、CESL での研修では各ホストファミリーに2名、CALS の研修では各ホストファミリーに1名ずつ滞在した。

（表1 CESL, CALS 語学研修参加者一覧）

| 氏名 | 学年 | 性別 | 研修時期 | 研修先 |
|---|---|---|---|---|
| OKB | 3年 | 女 | 2004年 8月 | CESL |
| MSE | 3年 | 女 | | |
| YNO | 2年 | 男 | | |
| KAT | 3年 | 女 | | |
| TAG | 2年 | 男 | | |
| HAY | 3年 | 女 | | |
| MUR | 3年 | 女 | | |
| HMG | 2年 | 女 | 2005年 2月 | |
| KWN | 2年 | 女 | | |
| AZM | 2年 | 女 | | |
| IKU | 2年 | 女 | | |
| MAR | 2年 | 女 | | |
| BDH | 2年 | 女 | 2005年 3月 | CALS |
| MMS | 2年 | 女 | | |

なお、各参加者に対し出発前オリエンテーションを数回開いたが、いずれもビザ取得、現地での学習内容、旅行日程などに関するものであり、異文化トレーニングに相当する事前研修は実施しなかった。

IDI およびインタビューに関しては、研修が始まる数日前に第1回目の IDI を、帰国して約2〜3週間後に第2回目の IDI とインタビューを実施した。インタビューでは、「研修中に印象に残ったこと」および「研修中に考えたこと」について自由に話しをしてもらうようにした。自由な発話を促すために、録音はせずメモを取ることで記録を行ったが、発話内容やその意図などについて誤りが無いことを確認するために、各インタビュー終了後参加者に作成したメモを見てもらい、必要であれば修正を行うようにした。

3.2. インタビューと IDI の分析について

インタビューの分析は、前述したように参加者の文化的内省度を中心に行ったが、具体的な方法としては、①表2に示す人物カテゴリーと体験カテゴリーを基に「誰と関わることで何を体験した（もしくは考えた）か」という枠組みで参加者の発話を整理し、②表3に示す内省度に基づき各発話を分類した上で、③人物カテゴリーを基に参加者の異文化接触範囲（「誰と関わったか」）を概観し、④体験カテゴリーを基に参加者の内省度（「何を体験し、どの程度考えたか」）を見ることとした。

（表2 カテゴリー一覧）

| 人物カテゴリー | |
|---|---|
| Host F | ホストファミリー |
| 地域 | 地域住民（主に一時的な接触） |
| 自分 | 自分個人の直接体験や対象を具体的に特定しない個人的感想<br>（例）<br>「レストランでハンバーガーの大きさに驚いた」（参加者 OKB）<br>「外国人に対する恐怖感はなくなったと思う」（参加者 KWN） |
| クラス | クラスメート |
| 徳大生 | 他の徳大生 |
| 学生 | クラス以外の現地一般学生 |
| 先生 | クラスの先生 |
| 友人 | クラス外で知り合った友人 |
| **体験カテゴリー** | |
| 言葉と COM | 言葉と COM スタイル |
| 関係形成 | 人間関係形成に関わる体験 |
| 食習慣 | 食習慣の違い |
| 生活スタイル | 生活スタイルの違い |
| 宗教 | 宗教の違い |
| 観光 | 観光体験（景色や史跡の違い等も含む） |
| 子育て | 子育ての違い |
| 娯楽 | 娯楽・余暇体験 |
| 人種 | 人種の違い |
| 教授方法 | 教授方法の違い |
| 買い物 | 買い物の方法に関する違い |
| 文化・人生観 | 自分の文化・人生観の内省 |
| 服装 | 服装の違い |
| 健康 | 健康管理に関する違い |

（表3 内省度尺度）

| 尺度 | 基準 | 発話例 |
|---|---|---|
| 高 | 違いへの対応に関する文化相対主義的観点からの感想や、これからの対応姿勢に関する発話 | 「色々な英語があり、色々な文化があることに気付いた」（参加者 MUR） |
| 中 | 出来事や文化差に対する感想に相当する発話 | 「教会がフリーの朝食を出すことに感心した」（参加者 YNO） |
| 低 | 出来事や文化差の記述に相当する発話 | 「少人数で多くの国から学びに来ていた」（参加者 MSD） |

なお、IDI に関しては専用のソフトウェアーを用いて分析を行った。

## 4. 結果および考察

### 4.1. インタビュー結果

#### 4.1.1. 参加者の異文化接触範囲

紙面の都合上、結果を参考資料 2 に示す。

同資料の人物カテゴリーを基に参加者の異文化接触範囲を見てみると、「ホストファミリー（Host F）」に関する発話が 874 件中 278 件（31.8%）と最も多く、次いで「地域住民」との一時的な接触（153 件, 17.5%）、「自分」（114 件, 13.0%）、「クラスメート」（108 件, 12.4%）、同行した徳島大学の学生「（徳大生）」（79 件, 9.0%）、クラス以外の現地一般学生「（学生）」（59 件, 6.8%）、研修先の「先生」（46 件, 5.3%）、現地で知り合った「（友人）」（37 件, 4.2%）の順で発話件数が分布していた。

坂田（2004）は、同大学の学生に対して実施した異文化体験セルフレポートの結果を基に、異文化体験が殆ど無い日本人大学生の異文化接触が「総じて日本文化の枠内で体験された表面的なもの」であったと報告しているが、今回の参加者はその結果と比較すると、よりリアルな異文化体験をしていることが分かる。

坂田（2004）が実施した異文化体験セルフレポートでは、①一週間程度の修学旅行や家族旅行（「旅行/研修」）を通した異文化接触、②「英語授業」での ALT との接触、③日本における「日常」での一時的異文化接触が全体の 83.8%（253 件中 212 件）を占めており、日本文化という枠組みの中で異文化体験をしている傾向が強く表れていた。たとえ修学旅行や家族旅行などで異文化を直接体験していたとしても、旅行中は日本人同級生や家族が常に同行していると考えられることから、それらの異文化体験は基本的には日本における日常の延長であり、日本文化の枠内で異文化との差異を定義してしまう可能性を秘めていると思われるからである。

参考資料 2 を基に今回の参加者の異文化接触範囲を見た場合、「自分」および「徳大生」を含む日本人との接触が 193 件（22.0%）となっている一方で、現地に滞在する人達との接触が 681 件（78.0%）と圧倒的に多くなっており、今回の研修は参加者が異文化と直接交流する機会を提供したという点ではかなりの効果があったと思われる。

しかしながら、現地に滞在する人達との接触に注目してみると、①ホストファミリー（278 件, 31.8%）、クラスメート（108 件, 12.4%）、研修先の先生（46 件, 5.3%）が全体の 49.5%を占めており、ホストファミリーやクラスメートなどの固定された人物との接触が異文化との主たる交流の場となっており、②地域住民との一時的な接触（153 件, 17.5%）、クラス以外の現地一般学生（59 件, 6.8%）や現地で知り合った友人（37 件, 4.2%）が全体の 28.5.0%となっていることから、固定された人物以外との交流は芽生え始めた段階であると推測される。

ここまで今回の短期海外語学研修における参加者の異文化接触範囲について述べてきたが、最終的には、①短期海外語学研修を通して直接異文化と交流する機会が増えているのもの、②ホストファミリーやクラスメートなどの比較的固定された人物との接触が主たる交流の場となっており、その他の人物との交流は芽生え始めた段階にある、という 2 点にその特徴を集約することができるであろう。

#### 4.1.2. 参加者の文化的内省度

次に、参考資料 2 に示す体験カテゴリーを基に、参加者の文化的内省度について概観してみることにする。

同資料を見ると、内省度「高」と判断された発話は全体の 6.8%（59/874 件）に留まっており、参加者の文化差に対する内省度が全体的にそれ程高いとは言えないことが伺える。多くの発話（600/874 件、68.6%）は内省度「中」に位置づけられ、参加者が文化差に直面した際に感じた感情や感想を述べているもの（例えば、「店員さんがフレンドリーなのでうれしかった」（参加者 HMG）や「黒人の名前を覚えるのが難しいと感じた」（参加者 TAG））であることから、本研修の参加者が体験した具体的違いを内省し、その違いを新たな視点から見つめるような枠組みを形成しているとは考えにくいと思われる。

一方、内省度「高」と分類された発話のみに注目すると、全発話（59 件）中 37 件（62.7%）が「言葉と COM」に分布しており、他の体験カテゴリーには殆ど分布していないことが分かる。今回の参加者が英語学習のために本研修に参加しており、英語能力の向上に対して比較的興味・感心を持っていたと思われることや、外国語能力およびコミュニケーションスタイルの違いに対する適応は異文化で生活を始めるその日から眼前の課題として参加者に迫ってくるものであることを考えれば、「言葉と COM」に分類された体験は参加者にとって敏感に反応しやすく、かつ非常にインパクトのある部類に属するものであったと想定される。その

結果、これらの体験は研修後も参加者の記憶に鮮明な形で保持されることとなり、他の体験カテゴリーよりも優先的に内省の対象となったものと思われる。

また、上記の結果を「異文化適応」という観点から見てみると、適応のごく初期の段階（この場合は最初の約1ヶ月目）においては「言葉と COM」に代表される英語や英語コミュニケーションに関する体験を基点として徐々に文化的内省が深化していく可能性を示唆していると考えられる。今回の参加者だけでなく日本人の多くが英語に対して非常に大きな関心を持っていること（津田, 1990）、ならびに英語や英語コミュニケーションにまつわる課題は英語圏で生活を始めるその日から重要な課題となり得ることを考えれば、文化的内省が「言葉と COM」に関連するものから徐々に深化していくことは非常に納得のいくところであろう。

ここまで参加者の異文化体験に対する内省度を中心にインタビュー結果を概観してきたが、まとめてみると、①今回の短期海外語学研修を通して参加者は様々な文化差を体験してきたようであるが、文化差に対する参加者の内省度は「違いに対して何かを感じた」段階であり、その違いを新たな視点から見つめるような段階には達していないと思われる、②違いに対する内省は、「言葉とコミュニケーション」という参加者が敏感に反応しやすい体験についての内省を基点として徐々に深まっていくと考えられる、という2点に集約できるであろう。

4.2. IDI 結果と異文化感受性の変化

次に、研修前後の IDI 結果（参考資料 3）について見てみることにする。

Profile (DS)に示される参加者の DMIS レベルを研修の前後で比較すると、研修前では 75.92 ポイント、研修後では 80.11 ポイントとなっており、得点上多少の変化が見られるものの、DMIS レベルを示す Dimension は共に「違いからの防衛」（Defense）の段階に留まっていることから、参加者の世界観には研修前後で殆ど変化が無いということが分かる。

次に、参加者の DMIS レベルに変化が見られなかった原因を、同資料中の WORLDVIEW PROFILE に示される 5 つのサブスケール（DD Scale, R Scale, M Scale, AA Scale, EM Scale）から見てみることにする。

サブスケール全体を見ると、DD Scale が「過渡的状態」（In Transition）から「解決済み」（Resolved）へと伸びていることから、「違いの拒否」（Denial）および「違いからの防衛」（Defense）に関わる事項については問題が無いと判断できるが、その他のサブスケールはいずれも「過渡的状態」（In Transition）の中で推移していることから、感受性発達上何らかの課題があることが分かる。

次に、「過渡的状態」（In Transition）と判断された 4 つのサブスケール（R Scale, M Scale, AA Scale, EM Scale）を研修前後で比較すると、AA Scale で 0.42 ポイントの伸びを確認することができるが、感受性の発達という観点から結果を見た場合、AA Scale の基礎となる R Scale と M Scale が各々0.02 ポイント、0.19 ポイント下がっていることから、AA Scale の伸びを支える基礎的なレベル（この場合は R Scale と M Scale）において解決すべき課題があることを示している。

言い換えれば、AA Scale に対応する「違いの受容」（Acceptance）および「違いへの適応」（Adaptation）の伸びは、必ずしも本当の意味で参加者が文化差を受容し、相対的立場から文化差を定義できるようになったというわけではなく、むしろ、「こうありたい」、「こうなりたい」という参加者の期待や希望を表したものであり、実際にはその基礎となる「逆転現象」（Reversal）や「違いの最小化」（Minimization）のレベルで解決すべき課題がある段階にとどまっているものと解釈できる。これらの理由から、研修後の DMIS レベルを「違いからの防衛・逆転現象」（Defense/Reversal）に留めている原因は、R Scale と M Scale での伸びが見られないことによるものであると結論付けることができる。

ここまで Profile (DS)と 5 つのサブスケールの結果を基に研修前後の変化を見てきたが、結果として、①参加者の異文化に対する基本的な世界観「違いからの防衛・逆転現象」（Defense/Reversal）には変化が無く、その原因としては、②DD Scale では研修の効果が確認できても、③R Scale と M Scale で研修の効果が無かったことが原因と考えられる、という 3 点を挙げることができると思われる。

以降、今回の短期海外語学研修の効果と課題を明らかにするために、DD Scale, R Scale, M Scale の結果を中心に考察を行うことにする。

4.3. 短期語学研修の効果と課題

4.3.1. 短期語学研修の効果

【DD Scale と短期語学研修の効果】

参考資料 4 中の DD Scale を見ると Denial Cluster および Defense Cluster におけるすべての項目で研修後の得点が伸びており（研修前:3.57、研修後：3.89）、特に異文化に対する回避度を

示す Avoidance of Interaction with Cultural Difference と異文化からの防衛度を示す Defense Cluster において比較的高い伸びを確認することができる（研修前：3.93、研修後：4.45）。両スケールの伸びが意味することは、最終的には「異文化とコミュニケーションが行えるようになった」、「異文化とのコミュニケーションにある程度の自信をもって臨むことが出来るようになった」ということに集約されると思われるが、今回の短期研修はこの点に関しては十分な効果があったと思われる。

この原因を先のインタビュー結果から見てみると、「言葉と COM」における内省度の高さが重要なカギになっていると思われる。「言葉と COM」における内省度の高さは、言い換えれば研修中に参加者が体験した英語力や英語コミュニケーションに関する課題を客観的で複眼的視点から見つめ直す枠組みが形成されはじめてきたことを意味するものであり、例えば「自分の英語でも結構通じるんだな」（参加者 BDH）、「自分の発音でも大丈夫なんだ」（参加者 OKB）という発話に見られるように、自らの日本人的英語を多様な英語の一つとして複眼的視点から正当に評価し始めたことを意味するものである。

そして、その結果、「時々クラスで積極的に発言できるようになってきた」（参加者 MSE）や「ホストファミリーや友達と英語で話すのはもどかしいが、話したいという気持ちが強くなってきた」（参加者 IKU）に見られる自己の英語力向上や英語コミュニケーション時の態度向上が参加者の中に芽生え始め、「異文化とコミュニケーションが行えるようになった」、「異文化とのコミュニケーションにある程度の自信をもって臨むことが出来るようになった」というポジティブな印象と自信を形成したものと考えられる。

4.3.2. 短期語学研修の課題

【R Scale と欧米崇拝主義的世界観】

参考資料 5 を見ると、R Scale には研修前後で殆ど変化が無く（研修前：3.15、研修後：3.13）、研修後も依然として逆転現象的な世界観を基に文化差を定義する傾向にあることが伺える。

坂田（2004）は、実質的異文化体験が殆どない日本人の場合、「英語」を軸に世界を二元化し、非英語圏文化よりも英語圏文化を優位に評価する傾向が見られ、その背景には欧米文化崇拝主義に代表される逆転現象的世界観が存在していると解説しているが、今回の参加者が 1 ヶ月程度であったとしても実際に異文化を体験していることを考えれば、上記の主張が今回の参加者に完全に当てはまるものではないことは確かであろう。

しかしながら、①参加者の異文化接触範囲がホストファミリーやクラスメートなどに限定されていること、②インタビュー結果におけるほとんどの体験カテゴリーで内省度「中」と判断された発話が圧倒的に多くなっており、全体的には「文化差に対し何かを感じた」レベルで参加者の文化的内省が留まっていることを考えれば、様々な人たちとの出会いを通して客観的・複眼的視点から文化差を見つめ直すような枠組みは本研修を通してはあまり形成されなかったものと思われる。そして、その結果、参加者が研修前に獲得していたと思われる欧米崇拝主義的で逆転現象的世界観が研修中・後も保持されたものと推測される。

例えば「（ホストファミリー先のアメリカ人の子供と比べて）自分の英語力の無さに危機感を感じ、このまま日本人が英語を話せないようだったらそのうちアメリカに占領されてしまうという危機感を感じた」という参加者 KTY の発話を見てみると、「日本人はあまり英語が話せない」ことがこの発話の前提となっており、その状況が改善されなければ（つまり日本人の英語力が向上しなければ）、英語力において優位に立つアメリカに「占領されてしまう」と考えていることが伺える。そして、今回の参加者が比較的限定された人間関係の中で生活していたことを考えれば、例えば「国際社会における英語の優位性」などについて多様な人たちの意見を基に複眼的視点から客観的に判断するのではなく、むしろ自らが研修前に獲得していたと思われる逆転現象的な世界観を基に文化差を定義していた可能性が高いと思われる。

同様の世界観は、例えば、「他国の学生は自分の意見をストレートに、そして表情豊かに話すことができるので、すごいと思った」（参加者 BDH）、「クラスメートがよく話しかけてくるので、（日本人よりも）やさしいなぁと感じた」（参加者 HYS）や「（日本人ではありえないことだが）見知らぬ人にもにこやかに挨拶をしてくるので好感を持った」（参加者 KTY）などの発話にも見出すことができる。これらの発話の裏にも「日本人は自分の意見をストレートに、そして表情豊かに表現することが無い」、それに「日本人は初対面の人に話しかけたり、にこやかに挨拶をしたりすることが無い」という想定が前提として存在すると思われるが、参加者の全体的な異文化接触範囲が限られていたことを考えれば、例えば多様な人との関わりから得られた経験・知識を基に「アメリカ人の

中にも日本人と同じように意見をストレートに言えない人がいる」といった可能性を考えるよりも、むしろ欧米崇拝主義的な枠組みを基に欧米的なコミュニケーションスタイルに対し「すごい」、「やさしい」、「好感を持った」という評価を行った可能性が高いと考えられる。

しかしながら、R Scale に関連する発話は上記のような英語力や欧米的コミュニケーションスタイルに関連するものだけではない。インタビューでの発話を見てみると、例えば、「アメリカでは多くの家庭で中国から養子を迎えていることに驚いたが、色んな人種がいるアメリカだからこそできるんだろうなぁと感心した。しかし、その一方で、日本で中国から養子を向かえるのは出来ないだろうなぁと思った」（参加者 OKB：「子育て」に分類）や、「休日の使い方が日本と異なっており、アメリカ人の方が休日を自分のために使っていると感じ、日本も見習うべきだと思った」（参加者 YNO：「生活スタイル」に分類）といった発話の中にも逆転現象の特徴を見出すことができると思われる。上記の例では、参加者 OKB、YNO が「養子を迎えるアメリカ家庭」 vs. 「養子を迎えようとしない日本の家庭」、「休日を自分のために使うアメリカ人」 vs. 「休日を自分のために使わない日本人」という二元論的で逆転現象的な枠組みを基に日米の文化差を定義していることは明らかであり、多様な人との関わりを通して例えば「アメリカ人の中にも養子に反対する人もいるかもしれない」といった観点から見ているわけではないと思われる。

これらの発話例を総合的に見てみると、今回の研修参加者が「言葉と COM」に代表される英語や英語コミュニケーションに関する文化差だけでなく、生活スタイルや子育て観などの広範囲な文化差に対しても逆転現象的な枠組みを基に定義を行っていることが分かる。今回の研修参加者が研修に参加する以前から欧米崇拝主義的な価値観から大きな影響を受けていたであろうことは彼らが同研修に自主的に参加したことから見ても明らかであると思われるが、参加者がその欧米崇拝主義的価値観を幅広い文化差に適用し、各々の文化差に対し欧米的価値観（この場合はアメリカの価値観）を「優」とする形で定義したことにより、上記のような逆転現象的発話例が出現したものと思われる。そして、今回の参加者に見られた逆転現象的評価は、彼らの文化的内省度がそれ程深化しておらず、多様な人々との関わりを通して形成された客観的・複眼的視点から文化差を見つめ直す枠組み（つまり文化相対主義的世界観）が十分に形成されていないことによるところが大きいと考えられるのである。

【M Scale に見る「隔たり感」】

参考資料 6 を見ると研修後の M Scale は 0.19 ポイント低下（研修前：2.67、研修後：2.48）しており、その原因が人間としての共通性に関する Similarity Cluster の低下によるものであることが確認できる。この結果を発達的側面から見た場合、M Scale（もしくは Similarity Cluster）の基礎となる DD Scale と R Scale の中でも、特に R Scale が研修後も「過渡的状態」となっていることが根本的な原因となっていると判断できる。

Similarity Cluster の低下が意味することは、最終的には「異文化との隔たり感が増した」ということであると思われるが、この隔たり感は、①R Scale に見られる欧米崇拝主義で逆転現象的な世界観が広範囲な事象に適用されたこと、ならびに②参加者の異文化接触範囲が比較的限定されており、多様な視点からの内省が行われていないことに起因するものと考えられる。

例えば「ホストファミリーと一緒にミサに出席したが、皆が賛美歌を大声で歌っているのを見て「すごいなぁ…」と感じた」（参加者 MUR）という発話例を取り上げてみると、日本における宗教的儀礼（例えば法事）とアメリカの教会におけるミサを比較した上で、アメリカのミサに対し「すごい」という評価を与えていることが分かる。アメリカのミサで皆が賛美歌を歌っている姿にある種の感動を覚え、アメリカのミサに対し優位性を感じたようであるが、その一方で教会の宗教的儀礼やアメリカ人の宗教観に対して大きな隔たりを感じており、「皆が賛美歌を大声で歌っている」ことに対し「自分はその中には入っていけないなぁ…」と感じていることが伺える。

この心理的・感情的隔たり感は、異文化との共通性を見出すための仮説を形成することを困難なものにしてしまう可能性を有しており、事実、参加者 MUR の場合を見ても、客観的な視点から双方の宗教的儀礼の違いを内省し、例えば「日本の法事もアメリカのミサも魂の救済や平安を求めているものであり、日本の法事は「静けさ」の中に、アメリカのミサは「華やかさ」の中に魂の救済や平安を見出そうとしているのではないか」などの仮説を形成できずにいる状態にあると考えられる。結果として、参加者 MUR の場合、日米の宗教的儀礼の根底にある共通性（例えば、「魂の救済」や「魂の平安」）を見いだせないでいるのではと推測されるが、

ここで多様な人たちとの日常的な関わりを通して、例えば「アメリカのミサにも色々あって、地区によってはとても静かなものもある」ということが分かれば、さほど隔たり感を感じることなく、もう少し違った形での仮説形成が可能であったと思われる。

参加者の異文化接触範囲が比較的限定されており、文化的な内省度も全体的にそれ程高くないことは前に示したとおりであるが、これらの傾向は多様な人たちとの関わりを通して文化的差を客観的・相対的視点から再定義するプロセスが十分に確立されていない可能性を示唆するものであり、自文化中心主義的で主観的な視点から文化的違いを定義する傾向が研修中・研修後も依然として保持されていることを意味するものである。

その自文化中心主義的で主観的な視点は参加者が研修前に獲得した欧米崇拝主義に代表される二元論的で逆転現象的な世界観に大きく影響されたものであり、参加者が研修中に体験した様々な文化差に対する内省を十分に行わなかった（もしくは行えなかった）ことが原因となり、その二元論的で逆転現象的な世界観を研修先での文化差に対し広範囲に適用し、文化差を評価してしまったものと考えられる。そして、その結果、人間としての共通性を認め、文化差を相対主義的観点から再定義するというよりも、かえって文化差や異文化との「隔たり感」が強調されてしまったが故に、人間としての共通性を見出す仮説を形成することができないでいる状態にあるのではと推測されるのである。

## 5. より効果的な短期語学研修を目指して

今回の研究結果を基に現在展開している短期語学研修の効果および課題を整理してみると、

① 参加者が自らの英語を使って異文化とコミュニケーションを行うことに自信を持ち始めているという点では十分な効果が確認された、

② 研修先で接触する人がホストファミリーやクラスメートなどに限定されていたことから、多様な人との関わりを基に文化差を客観的・複眼的な視点から内省する機会が少なかった

③ 参加者の文化的内省度がそれほど高くはなく、研修前に獲得していた欧米崇拝的世界観を研修先での様々な異文化体験に適用することで意味付け・評価を行っている可能性があり、結果として異文化との「隔たり感」が強調され、人間としての共通性を見いだす仮説を作り上げていく段階にまでは至っていないと思われる

という3点に集約できるであろう。

今後、同研修を基礎的異文化コミュニケーション能力の育成にも効果が期待できるようにアップグレードするには、上記②、③に対応するための施策を盛り込む必要があると思われる。

上記②に示した「多様な人との関わり」については、語学研修だけでなく、例えば学外でのインターンシップ活動に参加させるようなプログラムを開発することで対応が可能かと思われる。

語学研修とインターンシップ活動を組み合わせた短期研修プログラムはこれまでにも数多く開発されているようだが、中でもアメリカ、ワシントン州にある非営利団体 iLeap が提供するプログラムは非常に効果が期待できると思われる。通常のインターンシップ活動は、どちらかと言うと「研修参加者をインターン先に派遣するだけ」というケースが多いようだが、iLeap が提供するプログラム（Social Innovation in Seattle）では、語学研修以外にもインターンシップ活動に特化した授業をプログラム内に設定しており、インターンシップ先で体験した様々な出来事や課題などを授業で協議することが出来るようになっている。つまり、「ただ単にインターンシップ先に派遣する」だけでなく、授業およびインターンシップ先で多様な人たちと関わることを通して学びを提供できるシステムとなっている点で非常に高く評価出来ると思われる。

一方、上記③に示した「文化的内省度ならびに欧米崇拝主義的世界観」に関しては、例えば事前に異文化トレーニングなどを実施することである程度の対応が可能かと思われる。

坂田（2005）は、大学生を対象とした異文化トレーニングの効果について IDI を基に検証しているが、結果として、全体的な異文化感受性レベルが「違いからの防衛・逆転現象」（Defense/Reversal）から「違いの最小化」（Minimization）へと伸びており、IDI の R-Scale に見られる欧米崇拝主義的な世界観もかなり改善したと報告している。この結果を基に考えれば、研修前に異文化トレーニングを実施したとしても参加者が欧米崇拝主義的な世界観を保持したまま研修に参加する可能性は否めないが、全体的な文化的世界観（または異文化感受性）を「違いの最小化」（Minimization）まで発達させた状態で研修に参加させることが

可能になることから、「異文化との隔たり感」から生じる影響はかなり軽減されるものと期待できるであろう。

## 6. 本研究における課題

まず、「IDI を短期研修の効果測定に用いることの妥当性」を挙げることができる。Bennett（1993）も述べているように、異文化感受性の発達は非常に時間がかかるものであり、かつ長期間にわたる直接的異文化接触がなければ異文化感受生はなかなか発達しないものである。無論、今回のような短期研修の効果を測定するために IDI が不適切であると述べている文献は今のところ無いが、IDI が異文化感受性の発達を測定するために作られていること、ならびに異文化感受性の発達には長期間にわたる異文化接触が必要であることを考えれば、今回のような短期研修の効果を測定するために IDI が妥当であるかどうか、疑問が残るところである。

また、実施したインタビューに関しても課題が残るものとなっている。今回は、参加者の自由な発言を促すために録音をあえて行わなかったが、分析の際に細かなニュアンスが抜け落ちてしまった可能性は否めない。同時に、内省度の分類基準が不明確なものとなっており、発話によっては分類が難しいものもあった。以後の研究では改善する必要があると思われる。

### 引用文献


Bennett, M. J. (1993). Towards Ethnorelativism: A Developmental Model of Intercultural Sensitivity. In M. Paige (Ed.), *Education for the Intercultural Experience* (pp. 21-71). Yarmouth, ME: Intercultural Press.

Hammer M. R., &. B. (2002). *The Intercultral Development Inventory: Manual.* Portland, OR: The Intercultural Communication Institute.

Hammer, M. R. (2003). Measuring Intercultural Sensitivity: The Intercultural Development Inventory. *International Journal of Intercultural Relations , 27*(4), 421-443.

Paige, M. (2003). The Intercultural Development Inventory: A Critical Review of the Research Literature. *Journal of Intercultural Communication , 6*, 53-61.

国立大学協会. (2007). 「留学制度の改善に向けて」. 参照日: 2009 年 1 月 16 日, 参照先: http://www.janu.jp/active/txt6-2/ryuugaku.pdf

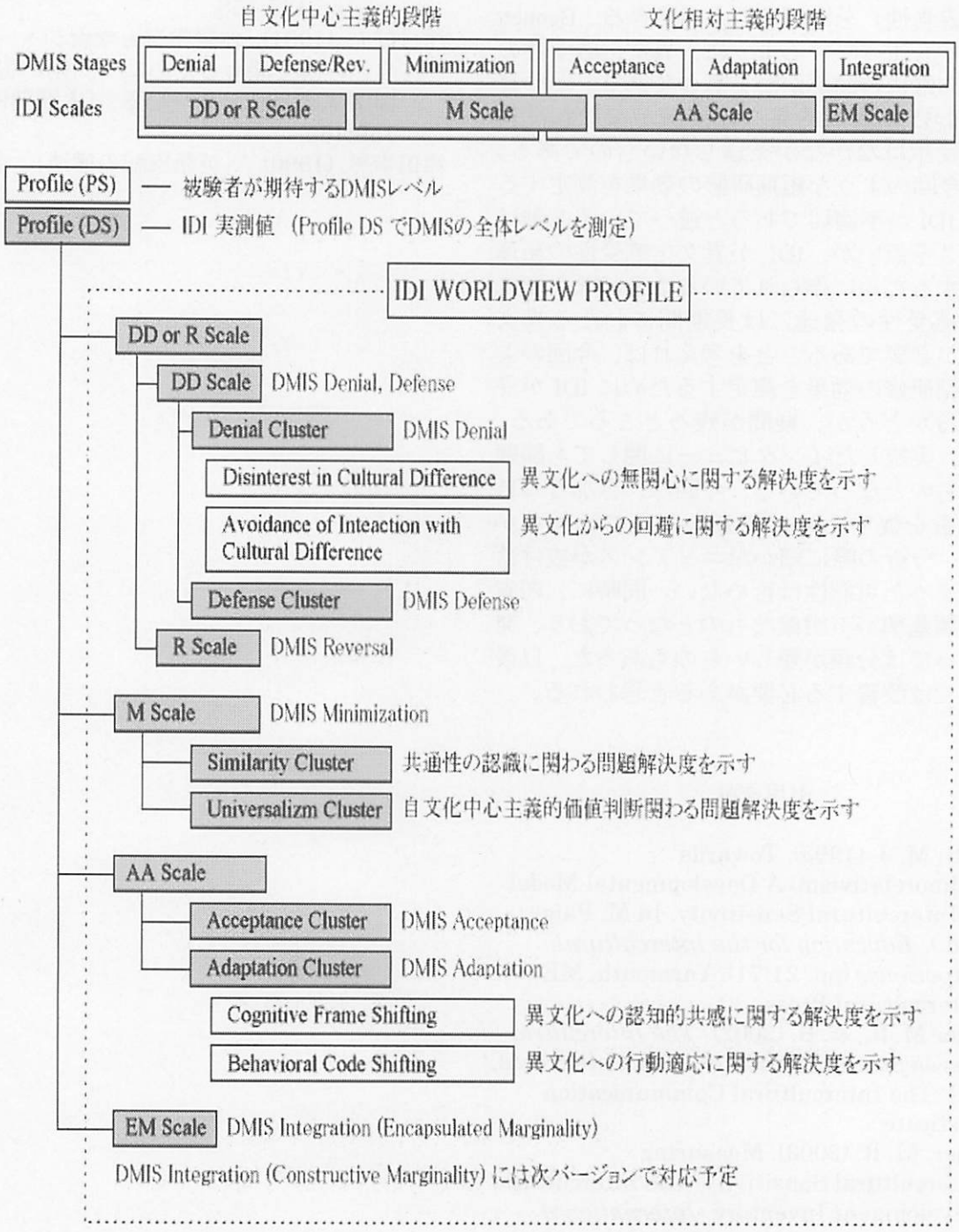
坂田浩. (2005). 異文化発達質問紙（IDI）を用いた多様性トレーニングの検証. 徳島大学留学生センター 「紀要」(2), 1-18.

坂田浩. (2004). 日本人大学の異文化感受性レベルに関する一考察. 「異文化コミュニケーション」, 137-158.

津村俊充. (1991). 体験学習と学習ジャーナル－自己理解を深めるために－. 南山短期大学人間関係研究センター紀要 「人間関係」(8), 159-166.

津田幸男. (1990). 「英語支配の構造」. 第三書館.

（参考資料１：IDI 尺度一覧）



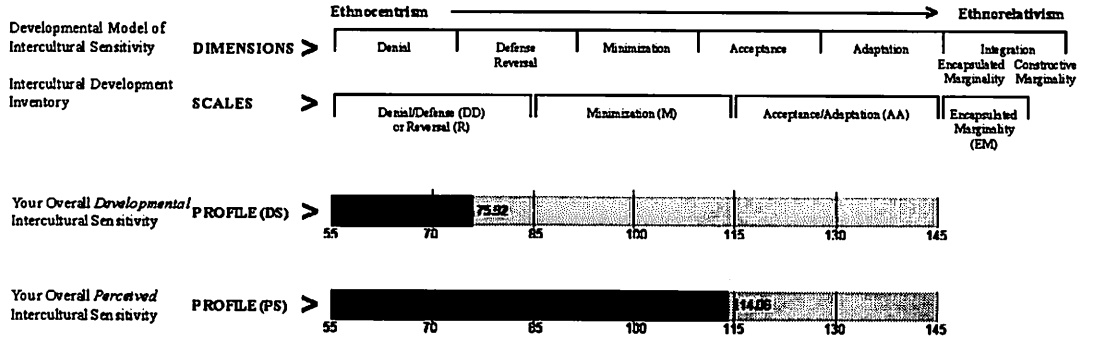
（参考資料２：インタビュー結果）

| 体験カテゴリー | 内省 | 人物カテゴリー | | | | | | | | 計 | | % |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | Host F | 地域 | 自分 | クラス | 徳大生 | 学生 | 先生 | 友人 | | | |
| 言葉とCOM | 高 | 5 | 6 | 19 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 37 | 211 | 24.1% |
| | 中 | 31 | 47 | 29 | 33 | 3 | 17 | 1 | 5 | 166 | | |
| | 低 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 5 | 0 | 0 | 8 | | |
| 人間関係形成 | 高 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 3 | 159 | 18.2% |
| | 中 | 37 | 9 | 5 | 25 | 11 | 2 | 7 | 4 | 100 | | |
| | 低 | 13 | 3 | 2 | 7 | 12 | 4 | 1 | 14 | 56 | | |
| 食習慣 | 高 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 114 | 13.0% |
| | 中 | 69 | 4 | 5 | 2 | 3 | 1 | 1 | 2 | 87 | | |
| | 低 | 17 | 2 | 0 | 0 | 4 | 0 | 1 | 1 | 25 | | |
| 生活スタイル | 高 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 4 | 109 | 12.5% |
| | 中 | 36 | 25 | 10 | 5 | 3 | 4 | 3 | 1 | 87 | | |
| | 低 | 4 | 6 | 2 | 2 | 0 | 2 | 2 | 0 | 18 | | |
| 宗教 | 高 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 75 | 8.6% |
| | 中 | 11 | 28 | 2 | 2 | 0 | 10 | 0 | 0 | 53 | | |
| | 低 | 4 | 10 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 3 | 20 | | |
| 観光 | 高 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 32 | 3.7% |
| | 中 | 3 | 1 | 4 | 3 | 7 | 0 | 0 | 0 | 18 | | |
| | 低 | 0 | 4 | 2 | 2 | 5 | 0 | 0 | 1 | 14 | | |
| 子育て | 高 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 3 | 31 | 3.5% |
| | 中 | 16 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 7 | 0 | 26 | | |
| | 低 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | | |
| 娯楽 | 高 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 29 | 3.3% |
| | 中 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | |
| | 低 | 15 | 0 | 0 | 0 | 14 | 0 | 0 | 0 | 29 | | |
| その他 | 高 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 29 | 3.3% |
| | 中 | 1 | 1 | 9 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 14 | | |
| | 低 | 1 | 0 | 6 | 0 | 7 | 1 | 0 | 0 | 15 | | |
| 人種 | 高 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 22 | 2.5% |
| | 中 | 0 | 1 | 0 | 6 | 0 | 4 | 0 | 0 | 11 | | |
| | 低 | 0 | 5 | 0 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 11 | | |
| 教授方法 | 高 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 21 | 2.4% |
| | 中 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 16 | 0 | 16 | | |
| | 低 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 5 | | |
| 買い物 | 高 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 18 | 2.1% |
| | 中 | 1 | 0 | 7 | 0 | 7 | 0 | 0 | 0 | 15 | | |
| | 低 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 | | |
| 文化・人生観 | 高 | 1 | 0 | 2 | 1 | 0 | 1 | 0 | 3 | 8 | 11 | 1.3% |
| | 中 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 3 | | |
| | 低 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | |
| 服装 | 高 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 8 | 0.9% |
| | 中 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | | |
| | 低 | 2 | 0 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 5 | | |
| 健康 | 高 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0.6% |
| | 中 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | | |
| | 低 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 4 | | |
| 計 | 高 | 11 | 6 | 22 | 10 | 0 | 3 | 1 | 6 | 59 | 6.8% | |
| | 中 | 207 | 117 | 74 | 80 | 34 | 41 | 35 | 12 | 600 | 68.6% | |
| | 低 | 60 | 30 | 18 | 18 | 45 | 15 | 10 | 19 | 215 | 24.6% | |
| | 総計 | 278 | 153 | 114 | 108 | 79 | 59 | 46 | 37 | 874 | 100.0% | |
| | | 31.8% | 17.5% | 13.0% | 12.4% | 9.0% | 6.8% | 5.3% | 4.2% | 100.0% | | |

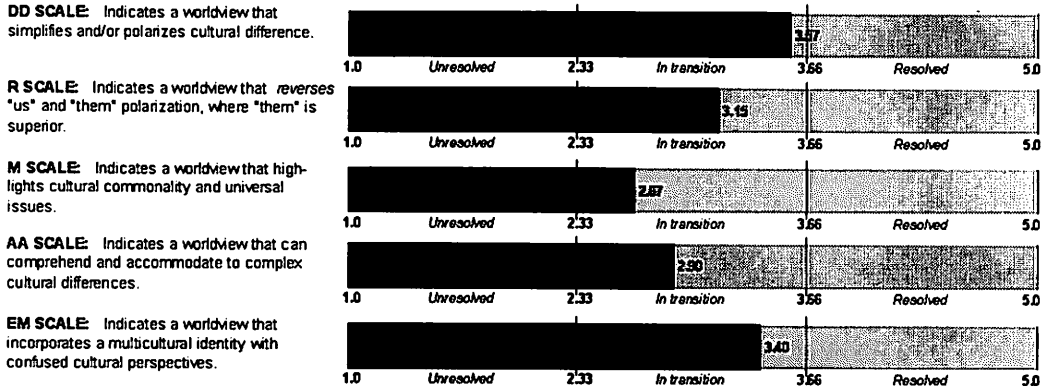
（参考資料３：IDI 結果）

## 研修前 IDI 結果

### INTERCULTURAL SENSITIVITY

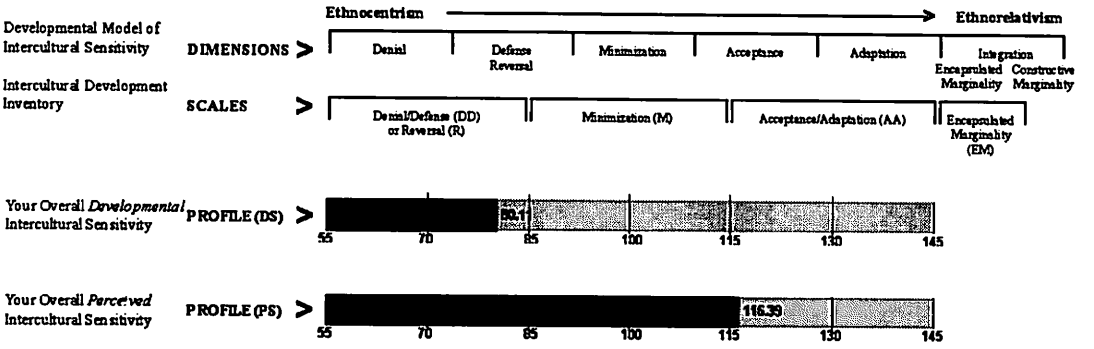



### WORLDVIEW PROFILE

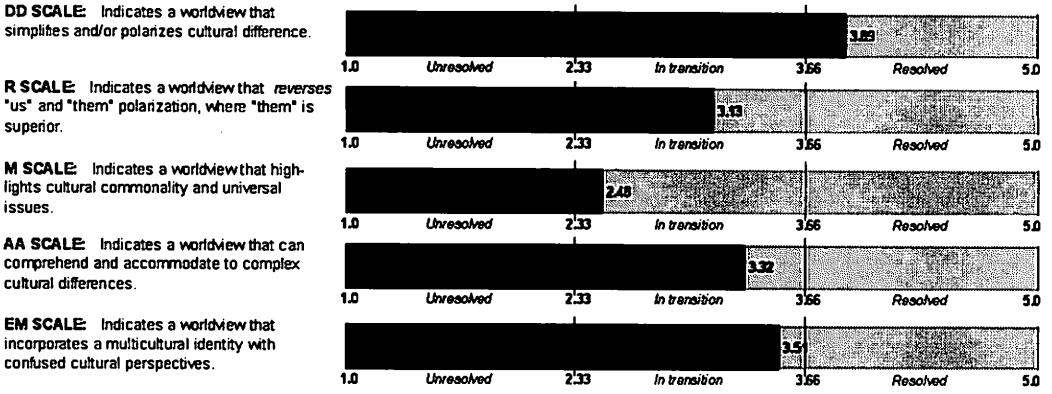



## 研修後 IDI 結果

### INTERCULTURAL SENSITIVITY




### WORLDVIEW PROFILE



（参考資料４：DD Scale）

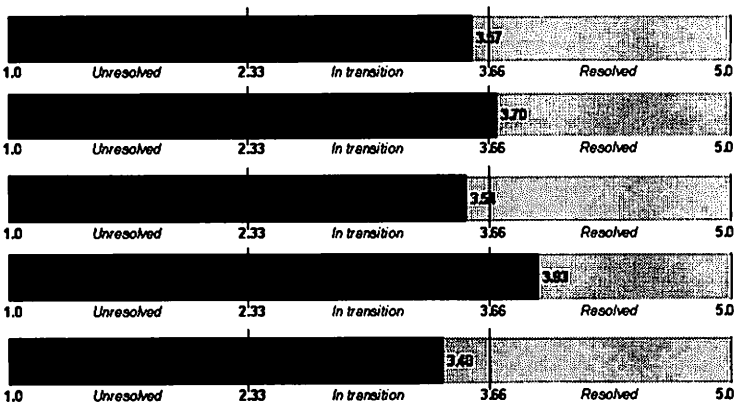
## 研修前 DD Scale

**DD SCALE: Indicates a worldview that simplifies and/or polarizes cultural difference.**

**DENIAL CLUSTER:** tendency to withdraw from cultural difference.

- Disinterest in cultural difference.
- Avoidance of interaction with cultural difference.

**DEFENSE CLUSTER:** tendency to view the world in terms of "us and them," where "us" is superior.



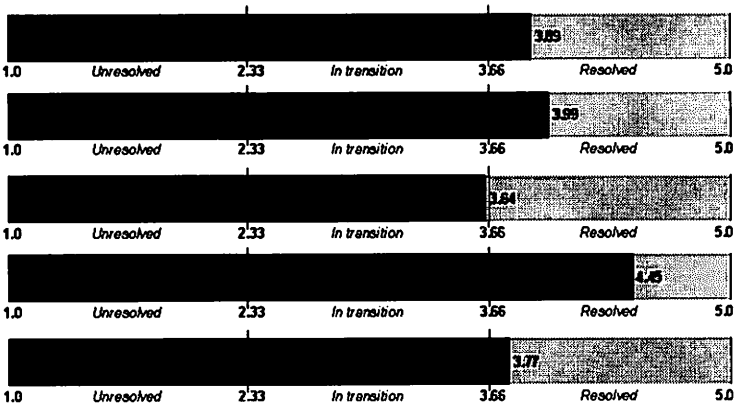

## 研修後 DD Scale

**DD SCALE: Indicates a worldview that simplifies and/or polarizes cultural difference.**

**DENIAL CLUSTER:** tendency to withdraw from cultural difference.

- Disinterest in cultural difference.
- Avoidance of interaction with cultural difference.

**DEFENSE CLUSTER:** tendency to view the world in terms of "us and them," where "us" is superior.




（参考資料５：R Scale）

## 研修前 R Scale

**R SCALE: Indicates a worldview that *reverses* "us" and "them" polarization, where "them" is superior.**

## 研修後 R Scale

**R SCALE: Indicates a worldview that *reverses* "us" and "them" polarization, where "them" is superior.**

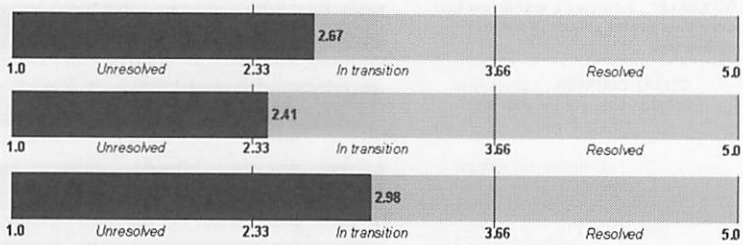
（参考資料 6：M Scale）

## 研修前 M Scale

**M SCALE: Indicates a worldview that highlights cultural commonality and universal values.**

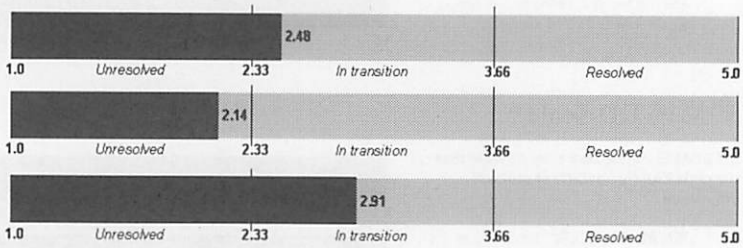
**SIMILARITY CLUSTER:** tendency to assume that people from other cultures are basically "like us."

**UNIVERSALISM CLUSTER:** tendency to apply one's own cultural values to other cultures.




## 研修後 M Scale

**M SCALE: Indicates a worldview that highlights cultural commonality and universal values.**

**SIMILARITY CLUSTER:** tendency to assume that people from other cultures are basically "like us."

**UNIVERSALISM CLUSTER:** tendency to apply one's own cultural values to other cultures.